

寺田寅彦

ラジオ・モンタージュ



ラジオ・モンタージュ

プドーフキンやエイゼンシュテインらの映画の芸術的価値が世界的に認められると同時に彼らのいわゆるモンタージュの理論がだいぶ持てはやされ、日本でもある方面ではこのモンタージュということが一種のはやり言葉になったかのように見える。この言葉の意味については本家本元の二人の間にも異論があるそうであつて、これについては近ごろの読売新聞紙上で八住^{やすみ}利雄氏が紹介されたこともある。

このモニタージユなるものは西洋人にとっては大に非常な発見であつたに相違ない。そうしてこれに対する解説を近代的な言葉で発展させればいろいろむづかしくも言えるようであるが、しかしわれわれ日本の旧思想の持ち主の目から見れば実質的にはいっこう珍しくもなるともないことのように思われてしかたがない。つまり日本人がとくの昔から、別にむづかしい理論も何もなしにやっていた筆法を映画の上に応用しているようにしか思われないのである。

たとえば昔からある絵巻物というものが今の映画、し

かもいわゆるモンタージユ映画の先駆のようにも見られる。またいわゆる俳諧連句と称するものが、このモンタージユの芸術を極度に進歩させたものであるとも考えられるのである。そうしてまたこのモンテーという言葉自身が暗示するように、たとえば日本の生花の芸術やまた造庭の芸術でも、やはりいろいろのものを取り合わせ、付け合わせ、モンタージユを行なって、そうしてそこに新しい世界を創造するのであって、その芸術の技法には相生相剋そうこくの配合も、テーゼ、アンチテーゼの総合ももちろん暗黙の間に了解されているが、ただそれが

なんら哲学的な術語で記述されてはいないのである。

ところがおもしろいことには、日本でエイゼンシュテインが神様のように持てはやされている最中に、当のエイゼンシュテイン自身が、日本の伝統的文化は皆モンタージュ的であるが、ただ日本映画だけがそうでないと言ったという話が伝えられて来た。彼は日本の文字がそうであり、短歌俳諧がそうであり、浮世絵がそうであると言いい、また彼の生まれて初めて見たカブキで左団次や松しょうちよう蔦つたのする芝居を見て、その演技のモンタージュ的なのに驚いたという話である。これは近ごろ来朝したエシ

オピアの大使が、ライオンを見て珍しがらずに、金魚を見て驚いた話ともどこか似たところのある話である。また日本の浮世絵芸術が外国人に発見されて後に本国でも認められるようになった話ともやはり似ていて、はなはだ心細い次第である。

それはとにかくモニタージュ芸術技法は使用するメディアムが何であつても可能である。たとえば食物でも巧みに取り合わせられた料理は一種のモニタージュ芸術と言われなくもない。そうだとすれば、ラジオによる音響放送の素材の適當なる取り合わせ、配列によつて一種の

芸術的モニタージュ放送を創作することが充分可能なわけであろう。

もつとも、従来行なわれたラジオドラマふうのものの中には、やや前記のモニタージュに類する要素をいくぶんか備えたと思われるものもあるかもしれない。それはその創作者にそういうはっきりした意図はなかったにしても、自然にそれと同様の効果をねらったものがあつたかもしれない。しかし、もしこういう明白な意識を設定した上でその創作をするとすれば、かなり新しくおもしろい試みがいくらも行なわれうるのではないかと思われ

るのである。

ただ一つラジオの場合に他の場合と区別しなければならぬ本質的の相違のある点は、ラジオはだいたい現在の瞬間にある場所で発している音楽をほとんど同時に他の場所に放送しているところにある。それゆえに、いろいろな時にいろいろな場所で進行した音響的シーンを勝手な順序や間隔をもってモニター的に配置することができないように見える。しかしこれには蓄音機というものがあって、その盤がちょうど映画のフィルムのごとく記録的に保存されうるのであるから、これを使え

ばかなりいろいろの勝手な技法を活用することができて
もいいわけである。

そう言えば、全部をレコードにして編集し、その編集
の結果をまた一つづきのレコードとしてしまえば、結局
ラジオの必要はなくなるのではないかという議論が持ち
出されるであろう。それはある意味では実際そうである
が、しかし必ずしもそうばかりではない。第一に、蓄音
機の存在にかかわらず音楽放送が行なわれている事実が
これに対する一つの答弁であるが、そればかりではない、
もっと重要なことがある。現在同刻に他所で起こりつつ

ある出来事の音響効果の同時放送中に、過去における別の場所の音的シーンを適当に挿入そうにゆうあるいはオーヴァーラップさせ、あるいはまたフェード・イン、フェード・アウトさせることによって、現在のシーンの効果を支配し調節するといふことができる。それは蓄音機だけの場合にては決して有り得ない一つの現象を出現させることになるからである。

たとえば満州における戦況の経過に関して軍務当局者の講演がある場合に、もし戦地における実際の音的シーンのレコードを適当に挿入することができれば、聴衆の

実感ははなはだしく強調されるであろう。また少し極端な例を仮想してみるとすれば、たとえばフランスでナポレオンの記念祭に大統領が演説したりする際に、もしも本物のナポレオンの声や、ウォータールの砲声や、セントヘレナの波の音のレコードが（そういうものがあったとして、それが保存されていたとして）適当に挿入されたとしたら、それは実に不思議な印象を与えるであろう。それほどでなくても、たとえば議院新築落成式の日、過去の議会におけるいろいろな故人の演説の断片を聞くことができても多少の感慨はあるであろう。

もしも、レコードと現場の放送との継ぎ目を自由に、ちようどフィルムをつなぐようにつなぐことができれば、すでに故人となった名優と現に生きている名優とせりふのやり取りをさせることもできるであろう。九代目X十郎と十一代目X十郎との勸進帳かんじんちようを聞く事も可能であり、同じY五郎の、若い時と晩年との二役を対峙たいじさせることも不可能ではなくなる。

もしまた、いろいろな自然の雑音を忠実に記録し放送することができるとなれば、ほんとうに芸術的な音的モニタージュが編成されうるであろうが、現在のような

不完全な機械で、擬音のほうがかえって実際に近く聞こえるような状態では到底理想的なものではできないであろう。しかし、こういう機械的の欠点はだんだんに除去されるであろうから、いつかはここで想像されたような音響のモニタージユによる立派な詩や絵のようなものが創作されて一般の鑑賞を受ける日が来るであろうと思われる。

こういうものができるとなった場合に、その「音画」のシナリオはどんなものが可能であろうか。これには実に格好な典型的なものがすでに元禄時代にできてい

るように私には思われる。それは芭蕉とその門下の共同制作になる連句である。その多数な「歌仙^{かせん}」や「百韻^{ひやくいん}」のいかなる部分を取って来ても、そこにこの「放送音画」のシナリオを発見することができらるであろう。もちろんこれらの連句はさらにより多く発声映画のシナリオとして適切なものであるが、しかし適当に使えばここにいわゆるモニタージュ的放送の台本としてもまた立派に役立つものと思われる。

以上はただ、放送事業の実際にうとい一学究のはなはだしい空想に過ぎないのであるが、未来の放送に関する

可能性についての一つの暗示として、思うままをしるし
てみた次第である。

（昭和六年十二月、日本放送協会調査時報）

日本文学電子図書館

ラジオ・モンタージュ

著 者 寺田寅彦

作成者 宮澤一郎

底 本 寺田寅彦随筆集 第三卷
岩波文庫、岩波書店

1991年4月5日 第55刷発行



日本文学電子図書館